

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本

地獄が

芸術になるとき

土居安子

どい やすこ／大阪国際児童文学振興財団 総括専門員。読書活動や日本児童文学史に関する研究を行う。共編著書に『子どもの本100問100答』（創元社）『明日の平和をさがす本』（岩崎書店）がある。



田島征彦／作

「とむい とむい。」この絵本は読み始めると十分はかかるという大作。けれど、三歳から大人まで息をつめたり、大笑いしたりして飽きることはありません。一九七八年に出版されたこの本がロングセラーなのは、いくつもの理由が考えられます。

まずはストーリー。地獄へ行かされた四人の庶民が知恵と特技を使って権力者である鬼をぎゃふんと言わせて自力で生き返るといふ痛快なストーリーは、反骨精神とユーモアにあふれています。これは、もちろん、上方落語の持つおもしろさが絵本として保証されているということになります。

そして、その題材が「地獄」であるということ。子どもは「死」に対して、怖いけれど知りたいという願望があります。この絵本はそれに答えつつ、「生き返る」といふ結末によって、子どもの不安感を払拭してくれるエネルギーを持っています。

田島征彦さんは、米朝師匠の落語を繰り返し聞きながら、まず、絵を創り、最後に言葉を入れたと言っています。この絵本は、落語を元にしながら、落語の語りを絵本の語りに換骨奪胎かんとつたたいしています。つまり、「挿絵のある本」ではなく、「絵本」という一つの芸術作品になっているのです。絵が豊かな物語を語り、擬音語や擬態語、会話など、言葉でしか表現できないことだけが、文字で表現されている、文字が絵の一部として配置され、ときには視覚的効果のために使われている、絵本というメディアを強く意識した作りになっています。

その絵は、型絵染という日本の伝統的な職人技を

用いながら、右から左へと視線を移動させ、ページをめくらせる力を持つ躍動感あふれる画面作りがなされており、「染」というどちらかといえば「静」を思わせる画法を「動」へと転化させていることで、内に秘めた力や深い伝統文化に根差した新しい創造を感じさせます。それは、古くて新しい個性的な鬼の描かれ方にも読み取ることができます。

一方、関西弁で語られていることや、おならや糞尿地獄が出てくることから、ユーモアのセンスたっぷりの作品になっています。おならや糞尿が下品さにつながらないのは、人間が「生きる」ための必然として描かれているためであり、排泄で笑わせようとする昨今の悪趣味な絵本とのへだたりを感じます。旧大阪府立国際児童文学館が原画を所蔵していましたが、現在は大阪府教育庁に移管されています。原画の透き通るような色と研ぎ澄まされた線は何度見てもほれぼれします。

二〇一一年に大阪府立大型児童館ビッグバンで田島征彦絵本原画展が行われたときには、筆者が『じごくのそうべえ』を読んだ後、子どもたちがいろいろな地獄とそれを四人の主人公が切り抜ける方法を考え、発表するというワークショップを行いました。子どもたちは夢中になって考え、この絵本からいかに想像力が広がるかを目の当たりにしました。

一九七〇年代の日本の絵本にこの一冊があり、五冊ものシリーズが出版され、今も読み継がれていることは、「絵本は芸術だ」ということを理屈ぬきに表していることだと心強く感じています。